

## 中学校 美術科 部会

部会長 川崎町立池尻中学校 校長 伊藤 敬之  
研究員 香春町立勾金中学校 教諭 七俵 正秀

### 1 研究主題

研究テーマ「豊かな情操を養う美術科学習指導法の研究」

サブテーマ「郷土の伝統・文化との関連を図る授業展開の工夫」

### 2 主題設定の理由

美術科の表現及び鑑賞の幅広い活動を通して養う能力・心情として「①創造活動の喜びを味わい愛好する心情を育てる」「②感性を豊かにする」「③美術の基礎的な能力を伸ばす」「④美術文化についての理解を深める」「⑤豊かな情操を養う」の5つがあげられている。それは、相互に関連しあいながら高まり、定着していくものであると思われるが、そのベースになるものとして、「主体的に学習に取り組む態度」が重要であると考えられる。

年間35時間（第1学年は45時間）という少ない授業時数ということもあり、扱う題材の数は必然的に限られてくる。また、制作する作品のサイズは以前よりも小さいものにせざるをえない。そんな状況の中で、主体的な学びを引きだし、前述の目標を達成するためには、授業展開の工夫が必要不可欠である。

短時間で効率よく基礎的な能力を身につけさせることができ、なおかつ生徒の興味・関心を引きつける魅力的な題材を用意できるか。また、生徒への提示の仕方です斬新なアイデアが出せるか。さらに、生徒の実態から考えると、直接的な生活体験の不足による発想力の低下や技能上のつまずきからくる意欲の低下を防ぐために、どんな手だてを構築するべきか。これからの美術科に求められている課題は多く、その克服へ向けた方策の1つとして、上記の主題を設定した。

### 3 主題の意味

#### (1)「豊かな情操を養う」について

情操とは、美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心のことである。それは、知性、感性、徳性などの調和の上に成り立ち、豊かな精神や人間としての在り方・生き方に強く影響していくものである。人がよりよく生きていくために必要不可欠なものであるとともに、非常に高次な心の働きであり、美術科の目標の中で最後に表記されていることにも意味があると言えるだろう。

美術の表現や鑑賞の活動は、さまざまな題材や素材、作品との出会いを通して、創造的な体験をする。その中で感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美意識を高め、自己の世界として意味付けをし、自らの夢や可能性の世界を広げていくことから、豊かな情操を養うのに適しているとされる。心を生き生きと働かせながら、よりよいものや美しいものをつくりだし感じとる喜びを、主体的な表現・鑑賞活動の中で生徒に実

感させることにより、美しいものや優れたものを大切なものとして生徒の心に強く印象づけることができるようになると思う。

#### (2)「郷土の伝統・文化との関連を図る授業展開の工夫」について

生徒の主体的な学びをひきだすための方策として、郷土の伝統・文化を授業に取り入れることに着目し、サブテーマを設定した。

美術の授業における生徒が抱える課題としては、直接的な生活体験の不足による発想力の低下や技能上のつまづきからくる意欲の低下があげられる。また、そうした経験の蓄積による苦手意識の形成は、ともすれば生徒の主体的な活動を妨げる要因となっている。一方、生徒の生活に目を向けると、地域の伝統・文化について深く知らなかったり、関心をもたなかったりするという面はあるが、地域のお祭りに積極的に参加する姿からは、それと意識していなくても、郷土を愛する心が息づいていると思われる。

また、本地域には、歴史的にも文化的にも価値があると言われる郷土の伝統・文化が残されており、素材としても、技能としても優れたものが多くみられる。それらを美術の授業において活用し、価値づけることは、生徒にとって郷土のよさを意識化し再発見する非常に魅力的な題材になり、主体的な学びにつながると考える。

さらに、今回の学習指導要領の改訂により新たに加わった内容として、「美術文化についての理解を深める」というものがあり、解説にも次のように表記されている。

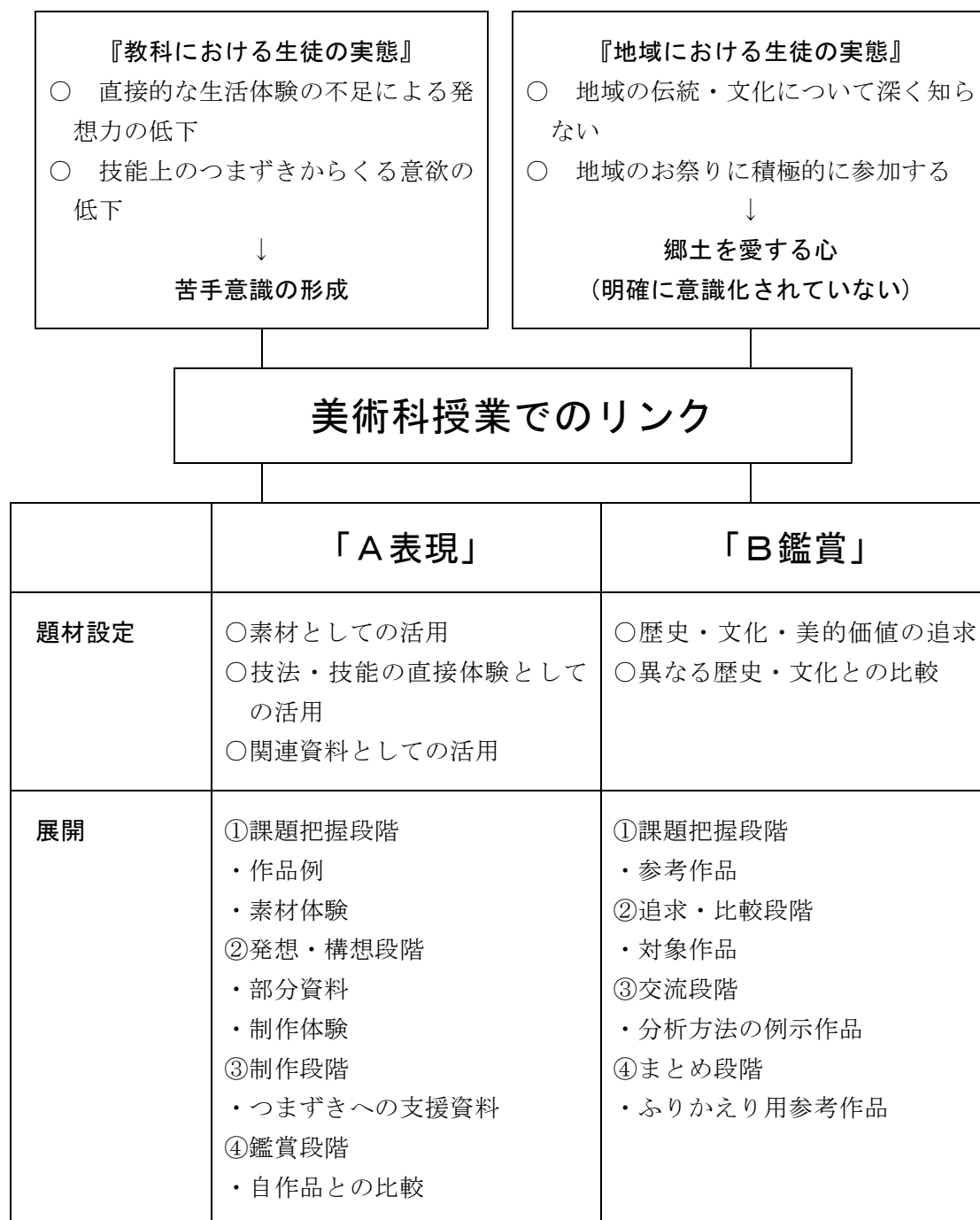
「これからの国際社会で活躍する日本人を育成するためには、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育や異なる文化や歴史に敬意を払い、人々の共存してよりよい社会を形成していこうとするための教育を充実する必要がある。」

「美術においては、古くからの美術作品や生活の中のさまざまな用具や造形などが具体的な形として残されており、受け継がれてきたものを鑑賞することにより、その国や時代に生きた人々の美意識や創造的な精神などを直接感じ取ることができる。それらを踏まえて現代の美術や文化をとらえることにより、文化の継承と創造の重要性を理解するとともに、美術を通じた国際理解にもつながることになる。」

美術科における郷土のよさの再発見は、生徒の作品制作・鑑賞活動における意欲の向上のみならず、郷土を支える思いの継承につながるだろう。それは、美術科の目標である豊かな情操を養うことにもなると考える。

#### 4 研究の目標及び研究仮説

表現及び鑑賞の題材設定及び展開にあたって、郷土の伝統・文化をいかに位置づけるかを工夫することにより、生徒の主体的な学習態度をひきだし、思考力・判断力・表現力等も含めた美術の基礎的な能力の向上につながると考える。



## 5 研究の計画（授業の計画）

(1) 題材名 『モノトーンの美しさ～地域の素材を活かした絵画表現～』

(2) 研究テーマ・サブテーマとの関係

- ・ 今回の題材を決めるにあたり本校の所在地である香春町を文化面で考えると万葉集にも歌われた歴史のある町であり、近隣には古く鎌倉・室町時代からの仏教文化の遺跡が残されており磨崖仏や寺院、それに伴う庭などがある。また、町内ではな

いが田川郡内2箇所に水墨画家として名高い雪舟等楊の作庭による庭園が2カ所あることにも注目した。他面から地域を考えて見ると香春町を支えた産業としては古より金・銅の鉱物を産出し、近世においては石炭・セメントを中心とする鉱業で栄えてきた背景がある。そこで今回の授業内容選定に当たり地域の産物と日本の伝統美を融合させた作品制作を行うことによって生徒に郷土に親しみをもち、日本の美術表現を知る機会とすることを考えた。

- ・ 今回の作品制作では日本近代の産業を支え香春町でも多く産出された「石炭」を地域に根ざした素材として授業を構築することにした。授業を構成するに当たり石炭を絵の具として用いた絵画作成と削り出すことで彫刻・工芸表現の二つが考えられた。しかし、彫刻・工芸表現をするための技術の難易度が高く加工の作業時間が絵の具制作・絵画表現で授業を進めた場合の倍以上掛かることが考えられたため石炭による絵画表現で授業内容を構築することにした。
- ・ 石炭による絵画表現を考えるに当たっては、モノトーンによる絵画技法である水墨画の表現技法を応用して描く事を考えた。試験的に最初の手順から作品制作を行ってみたが水墨画と同等の表現が可能であった。そこで水墨画の作品を石炭絵の具で摸写を行うことにより、日本の古典美術を学ぶことと同時に地域に根ざした素材を使う内容として全体計画を作成した。
- ・ 摸写を行う題材としては田川郡にゆかりが深い雪舟等楊の作品を摸写していくこととした。扱う作品を国宝に認定されているもののみとすることで日本の文化財保護に係わる知識と理解を深めることも目指した。

### (3) 生徒観

本学年の生徒は、美術に興味・関心をもつ生徒が多く、さまざまな課題に対して意欲的に取り組む姿勢が見られる。1年生時に取り組んだ「自画像を淡彩で描こう」の課題では、人物デッサンを行うだけでなく、効果的な淡彩画の技法を生徒が交流をすることによって全体の【発想や構想の能力】【創造的な技能】を伸ばす場面が見られた。

しかし、作品に取り組む際に失敗に対する不安から、技法などに対する理解はあっても消極的な制作手法を選ぶ生徒も多く、個人で作品に取り組む際にはそのような面もみられた。

### (4) 指導観

本單元では、石炭を顔料として絵の具を作成し、水墨画の表現技法を活用して雪舟等楊の作品摸写を行う。まず、2年生の修学旅行に向けて日本の美術を学んでいく中で、古典美術表現として水墨画を学ぶ。その際には地域の史跡と関連がある雪舟等楊の作品を紹介し水墨画に対する関心をもたせ、目標をもって制作する意欲を高める。続いて石炭を素材として絵の具を制作することで、明治から1970年代にかけての地域で産出されていた石炭を見つめ直し、地域の歴史や産業への理解を深め、改めて地域のすばらしさを感じさせ、それを大切に思い継承していこうとする気持ちを育てたい。

この制作は「鑑賞→素材の作成→水墨画の練習→石炭絵の具の試用→(絵の具の修正)→摸写」という手順で制作されるが、自作の絵の具を使用することで、絵の具の使用具合を確かめ、素材への関心や理解を高めさせたいと考える。また、摸写を行うことで過去の作品に対する理解を深め、作品の特徴を他者と交流することで、原作の本質にせまるとともに、作品を完成させることで達成感や喜びを味わわせる。これらの取組は今後の美術の作品制作・鑑賞への意欲の向上につながると考える。

(5) 題材の目標及び指導計画

① 題材の目標

- 日本の美術作品に興味・関心をもち、進んで調べたり、技法の特徴を見いだそうとすることができる。 **【美術への関心・意欲・態度】**
- 日本の美術作に関する知識をもとに作品制作の構想を練ることができる。 **【発想や構想の能力】**
- 素材を目的に合わせて加工し、作品にあった表現をすることができる。 **【創造的な技能】**
- 作品を鑑賞することで制作者の思考や技法を理解することができる。 **【鑑賞の能力】**

② 指導計画 (時間数 10 時間)

次	配時	学習の流れ	学習支援の留意点	評価の規準	材料用具
1	1	1 水墨画を鑑賞し、長い年月に渡って伝えられてきた技術や材料の特性を知る。 2 石炭を素材にして用いることの意義を地域の歴史から学ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教科書・美術史料に掲載されている水墨画を提示し、歴史上の意味や作品の技法について考えさせる。</li> <li>・ 素材である石炭を材料として提示し、作業工程を考えさせる。</li> </ul>	<b>関</b> ：水墨画のよさや工夫について考えようとしている。 <b>鑑</b> ：材料や作品鑑賞を通して水墨画のよさや工夫に気づき、発表している。	学習プリント、作業用具・素材(乳鉢・石炭)
2	3	1 乳鉢を使用して物を磨り潰す技法を知る。 2 乳鉢で石炭を磨り潰し細かい粉にする(2時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 石炭を磨り潰し粒子が舞い上がり吸い込むことによって健康を害する可能性があることを伝えマスクの着用させる。</li> <li>・ 絵の具として使える粉の大きさを示し、体感させて作業を進めさせる。</li> </ul>	<b>関</b> ：顔料を磨り潰す作業に集中して取り組める。 <b>技</b> ：顔料を効果的に作成する技法を使用することができる。	作業用具・素材(乳鉢・石炭・フィルムケース)
3	2	1 墨汁を使って水墨画の技法を練習する。 2 顔料を膠と合わせ絵の具を作り技法の復習をしながら試し塗りを行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 絵の具の試し塗りを行う際に水墨画の技法を練習させる。</li> <li>・ 摸写作品の事例を示し摸写を行う意義付けを行う。</li> </ul>	<b>関</b> ：作品制作に向けて素材の準備を整えることができる。 <b>構</b> ：摸写する作品の作品構成を考えて作品選択	作業用具・素材(乳鉢・石炭・フィルムケース・ポイト・膠・

		3 模写の意味を学び、雪舟の作品の中から模写する作品を選び下描きを行う		を行うことができる。	わら半紙・和紙)
4	3	1 作品に着色をする。 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 模写する作品の表現で迷う場合は表現技法名を用いたアドバイスをを行い技法と技法名を定着させる。</li> <li>・ わら半紙を用意して表現技法を試しながら作業できるようにする。</li> </ul>	<b>構</b> ：着色する手順を考えて着色することができる。 <b>技</b> ：作品にあった効果的な水加減や筆遣いを行うことができる。	作業用具・素材（石炭絵の具・わら半紙・和紙）
5	1	1 作品の鑑賞を行い、雪舟の作品制作における思考や技法に対する意見をまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作品制作に当たって自分の作品で工夫した点をまとめて発表させる。</li> <li>・ 墨と石炭の表現性の違いを指導する。</li> </ul>	<b>鑑</b> ：作品鑑賞を通して単色ならではの表現の良さと素材による違いを考え発表している。	作品（生徒作品・雪舟の作品のコピー）

6 指導の実際 平成28年10月6日（木） 場所 美術教室

(1) 指導観

前時までに生徒たちは、次のことを積み重ねてきた。

- ① 水墨画を鑑賞し作品の特徴と技法・歴史を確認する。
- ② 水墨画の技法を墨汁を使って練習し、技法と描いたときの感触を体験する。
- ③ 顔料として使えるところまで磨り潰した石炭を触り、石炭絵の具の粒子の大きさを確認する。
- ④ 乳鉢の使い方を班ごとに交流しながら顔料(石炭)を作る技術を習得する。
- ⑤ 顔料(石炭)と混ぜ合わせ、絵の具として使用する。

本時では、今までの取組をワークシートで振り返ることで思い出させることで、作品作への意欲を高め、雪舟の作品模写を行うことによって単色による淡彩表現への理解を深めさせたい。

(2) 主眼

制作した顔料絵の具を使い、水墨画の模写を行うことで、単色表現に対する理解を深めることができる。

(3) 準備

[教師]・乳鉢 ・ 膠 ・ 練習用和紙

[生徒]・教科書 ・ 美術資料 ・ ファイル ・ デザインセット ・ 筆記用具

・ 岩絵の具（石炭粉末：フィルムケースに保存）

(4) 展開 (4-1)

	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
導	1 前時までの学習内容を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ワークシートを使用して作品制作の過程と本時の取り組みを確認する。</li> </ul>	

入	2 本時のめあてを確認する。	・ 手順の確認も合わせて行う。	
	めあて 自作の絵の具を使って雪舟の水墨画を模写しよう。		
展 開	3 各自で顔料と膠を混ぜ合わせ試し塗りをする。  4 和紙に着色する。	・ 和紙を使った試し塗りで濃度の確認をさせる。 ・ 確認作業を班で行い、絵の具の練り合わせや濃度の調整を行わせる。 ・ 顔料の状態調整をする生徒には乳鉢を貸し出す。 ・ 作品の見直す部分を指示する。	・ 原画の内容を理解して、制作手順を考えることができる。【発想や構想の能力】 ・ 自作絵の具を用いて、水墨画の技法で描くことができる。【創造的な技能】
終 末	5 本時のまとめをする。	・ 本時の進行状況を確認し、次時の目標と注意点を確認させる。	



【写真1：顔料作成】



【写真2：模写】



【写真3：1時間の作成進捗】

## 7 研究のまとめ（成果と課題）

### ○成果

- ① 地域にある素材を使った活動は子どもたちに石炭に興味を持たせることができた。
- ② 絵の具を作るという体験は、日常使っている絵の具がどのようにして作られている物であるか知り絵の具そのものに興味を持つ機会となった。
- ③ 地域にゆかりのある人物の作品の模写は、作品と制作した人物に強い関心を持って作品制作をすることができた。

### ●課題

- ① 乳鉢など必要な用具がそろっていないと効率よい作業工程は望めない。
- ② 石炭に関しては事前処理と健康に関する配慮が必要である。
- ③ 石炭の定着材として膠を用いたが、粒子が粗い場合には剥落しやすくなるので作品管理に注意が必要である。